

平成28年度 学校評価書

学校名 兵庫教育大学附属中学校

自己評価結果

※ 評価は4点満点 4 達成している 3 おおむね達成している 2 あまり達成していない 1 達成していない

重点項目	評価観点	評価項目（取組内容）	評価	評価					
研究・研修の充実	研究・研修体制の確立	研究・研修体制を確立し、研究授業や職員研究会の充実を図り、日々の実践等の分析や評価を行い「必然性、納得性、実践可能性」を満たす具体的な研修を進める。	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策		
		研究・研修体制を確立し、研究授業や職員研究会の充実を図り、日々の実践等の分析や評価を行い「必然性、納得性、実践可能性」を満たす具体的な研修を進める。	2.7	2.9	○4月・5月の早い段階で研究目標、計画、内容の共通理解を図る。 ○職員研究会、研修会、研究授業を計画的に行い、職員が協力して研究に取り組む機会を増やすことを通して、研究内容の深まりと共通理解を図る。 ○外部講師を招へいするなど、ユニバーサルデザインについての先行研究に学び、本校に適したユニバーサルデザインと教科に共通したユニバーサルデザインのあり方を探る。 ○学校の研究テーマと教科の研究テーマの関係を深め、相互に連携して研究目標を達成できるようにする。 ○全ての教科で大学との連携を強化し定期的に指導を受ける機会を設ける。 ○生徒の変容など、研究実践の成果・課題を検証し、PDCAサイクルを行う。 ○評価について、「ユニバーサルデザインの視点から、何をどのように評価するか」共通理解を図る。	○講師を招聘しての研究会ではポータルフォリオなど評価について知識を深めることができた。 ○本年度、評価について研究を行ったが、評価の目的・方法・基礎理論などの共通理解が十分でなかった。 ○研究授業と授業研究会は有意義であった。もっと多くの先生が実施するべき。 ○大学や地域の教員との連携については、更に交流を深める必要がある。	○大学の附属という特性を活かし、大学と連携して研究を深める。 ○地域の学校・教員・関係機関との関係づくりを進める。 ○3附属の系統性ある研究推進を目指す。		
	研究発表	研究発表会での出会いを大切に各地の実践の情報を共有するなど、研究の拡がりを意識した手立てを工夫する。研究発表会を開催し、教育研究の成果を公開発表する。	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策		
		研究発表会での出会いを大切に各地の実践の情報を共有するなど、研究の拡がりを意識した手立てを工夫する。研究発表会を開催し、教育研究の成果を公開発表する。	2.9	2.9	○研究発表会が日々の研究実践と研究成果の発表となるよう、日常の授業研究を推進する。 ○市・地域・県レベルの研究組織とつながりもつなど共同研究や他校の研究発表会への参加を進め、研究・研修の機会を増やすとともに研究内容を深められるようにする。また、大学との連携を深める。 ○教科の研究協議会の持ち方を統一し、公開授業の内容だけでなく、研究協議のテーマについて参加者と深く意見を交流できるようにする。また、指導助言のあり方、時間の持ち方など改善を図る。 ○研究発表会の参加者を増やす方策や授業研究会の参加者確保について工夫を行う。	○本年度は、午前中に授業研究会をもち、研究内容について多くの意見をいただくことができた。 ○院生を無料としたことで院生の参加者が増えた。参加費についても検討する時期にきている。 ○地域からの参加者が少ないところを改善する方策が必要。	○研究発表会の方法、内容等を根本的に見直し、大学や地域の教員と連携をした、実質的に実りのある研究会にする。		
	研究学校としての魅力	「確かな学力」の定着	生徒の学習の達成状況を把握して生徒の学習における興味・関心を引き出せるよう授業改善・授業内容を改善し、基礎的基本的な学力及び知識・技能の定着を図る。	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
			生徒の学習の達成状況を把握して生徒の学習における興味・関心を引き出せるよう授業改善・授業内容を改善し、基礎的基本的な学力及び知識・技能の定着を図る。	2.9	3.0	○生徒が授業のめあてを理解し、「何をするのか」「何を考えればいいのか」「どんな方法でとりくめばいいのか」がわかるように授業の見直しをもたせる。 ○結果として「何をどのように学んだのか」を振り返る活動を取り入れ、メタ認知能力を育成する。	○授業毎に「めあて」「見直し」「自己評価・相互評価」「まとめ」を組み込み、苦手力所 つまずきの把握ができやすくなった。○メタ認知能力が育成されているかは、計りがたい部分がある。	○何を学ぶのか見直しを立てるスキル、身に付けたことを振り返る力、また振り返り活動の充実を計ることが必要。	
		家庭学習の指導	家庭学習の手引きなどを活用して、授業に生かす家庭学習の視点から課題を出し、適切に評価することで学習意欲を高め、家庭学習の定着を図る。	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
			家庭学習の手引きなどを活用して、授業に生かす家庭学習の視点から課題を出し、適切に評価することで学習意欲を高め、家庭学習の定着を図る。	2.7	2.9	○家庭で取り組める適切な課題を設定し、確実にを行うように指導する。 ○家庭学習が定着しない生徒に対して、具体的な取組方法を伝えるなど、個別に支援をすすめる。	○個々の課題を明確にし、個別に支援していく。 ○毎回の学習で必ず宿題を出し、家庭学習を促した。	○継続をすることで確かな学力の向上を図る。 ○支援が必要な生徒への個別支援を継続する。	
		授業の充実	「思考力・判断力」の育成	体験的、問題解決的な学習を取り入れ、協働学習場面を構成して、コミュニケーションによる思考を育む授業を行い、主体的に学びを深める生徒の育成に努める。	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
				体験的、問題解決的な学習を取り入れ、協働学習場面を構成して、コミュニケーションによる思考を育む授業を行い、主体的に学びを深める生徒の育成に努める。	2.9	3.0	○グループ活動を重視し、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習法であるアクティブラーニングについて研究を深め、実践する。 ○単元で重点的につけたい力を明確し、つけたい力を育成するための最適な活動を取り入れるなど、工夫した単元構成を行う。	○ペア活動やグループ活動を授業に取り入れ、生徒が表現する機会を多く取り入れた。 ○中身のある授業にするためには研究をさらに進める必要がある。	○全員が参加できるグループ活動の研究 ○継続して取り組んでいく。 ○実態に合ったアクティブラーニングの方向性を検討する。
言語能力の育成			各教科の単元・授業のねらいを達成するために効果的な言語活動を取り入れ、国語科と連携して生徒の言語能力の向上を図る。	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
			各教科の単元・授業のねらいを達成するために効果的な言語活動を取り入れ、国語科と連携して生徒の言語能力の向上を図る。	2.9	2.9	○話し合いの場面では、単に自分の考えを伝え、相手の意見を聞いたりするだけにとどまらず、互いの考えを伝え合い、深め合う活動を行う。 ○書く場面では、思考・判断した結果をまとめるだけでなく、自分の思考の足跡も振り返らせる。 ○根拠を明確に述べたり、討論を深めたりする指導方法を、国語科の授業を公開するなどの機会を使って研修する。	○ペア学習、班学習で話す聞く力の向上に取り組んだ。 ○評価活動を通して、書く活動に時間を使った。	○国語科との連携のあり方	
ICTの活用	ICT機器を活用した効果的・効率的な授業により、思考の可視化を図り、生徒の学習意欲の向上、学力の定着、教科に対する興味関心の向上に努める。	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策			
		ICT機器を活用した効果的・効率的な授業により、思考の可視化を図り、生徒の学習意欲の向上、学力の定着、教科に対する興味関心の向上に努める。	3.0	2.9	○教員のICT活用は進んでいるが、生徒のICT活用についてはまだ取組めていないので、これから進めていく。 ○ICTを活用した授業の工夫について、授業参観をするなど教師が情報交流を活発に行いお互いの技術向上を図る。 ○教員の使用する情報機器や教室設置の機器を改善しICTを活用しやすい環境を整える。	○授業でのICTの活用は進んでいるが、機器の整備が十分ではない。 ○ICTの活用についての研究や情報共有をする機会があれば更によかった。 ○生徒のICT活用を進めていきたい。	○ICT機器の整備と利用方法や成果について研究を深める。		

道徳・人権教育の充実	道徳教育	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	体験的・実践的活動を生かし、生徒の道徳性の涵養に努め、道徳的実践力を育成する。	2.9	3.2	○授業参観や研究発表会で道徳の授業を公開し、家庭や地域の人々に理解と協力を得られるように取り組む。 ○「特別の教科 道徳」の趣旨・内容を踏まえた研修を行い、教師の授業力を高める。	○各学年の道徳担当の先生が連携を取り合い活動していたように感じた。	○今年度の取組みを継続した取組みへ。
	人権教育	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
いじめは重大な人権侵害であることを理解させ、仲間づくりを進める中で、互いの存在に敬意を払える関係を構築し、人権感覚の備わった生徒を育成する。	2.8	3.1	○人権教育の年間指導計画を見直し、各教科や総合的な学習の時間等、教育活動全体を通して取り組むようにする。 ②いじめ、インターネットによる人権侵害等、今日的な人権課題についての研修を深め、指導力を向上させる。	○授業の中での観察やつぶやきを見逃さないようにこころがけた。	○仲間作りや他者理解、自己理解など、全体の取組として啓発を推進する。	
学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	○評価は概ね適切である。 ・研究校としての着実に成果をあげており、もっと様々な機会で広く発信することを期待する。 ・より一層の学力の定着・向上を目指すため、ICT機器の活用、学び合いの充実を期待する。 ・支援の必要な生徒や学習につまずきを感じている生徒を大切に、全ての生徒の学力定着にむけての方策を期待する。					
中学校としての魅力 心つながる生徒指導の充実	学年経営	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	学年経営の基本方針を明確にし、相互理解に努め、連携して職務に取り組むとともに、他学年との情報共有に努めて指導の一貫性を保つ。	3.0	2.8	○情報交換をより密に持ち、生徒へ向き合う体制づくりを今後も継続して進めていく。 ○各種委員会での審議内容を、職朝記録のように共通理解できるファイルを作ったどうか。	○学年経営の方針に基づいて定期的に情報交換を行った。 ○生徒の日々の状況を把握し、学年全体で柔軟に対応することができた。 ○3年計画で取り組んできた進路指導、生きる力の育成などに取り組むことができた。	○他学年、教科間を通じた情報共有を推進する。 ○学年会など、全学年の定期的な実施により開催機会と時間を確保する。
	学級経営	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	集団活動・生活ををする際のルールが学級内に定着することやふれあいのある本音の感情交流がある状態をつくることで、互いを認め合い、一人ひとりにとっての居場所となる学級づくりに取り組む。 互いを認め合う風土をつくり、どの生徒にも居場所としての、三つの間【時間、空間、仲間】がある学級経営に努力する。	2.8	2.9	○学級内ルールの定着に務める一方で、人として当然身につけなければならない規範意識が自主的に育つように、教師集団がより親密に連携する。 ○Q U調査を活用して、居心地の良い学級づくりについて情報収集を行なうと同時に、トラブルを未然に防ぐようにつとめる。	○ルールの定着、居心地のいい学級作りのため、教育相談やテーマに沿った話し合いなど機会を逃さず学級経営に取り組んだ。 ○個々の担任の裁量や力量に依るところが大きい。 ○一人一人の学校での居場所作りに、学級通信などを発信しながら、保護者と連携して取り組めた。	○学級経営、決まり事の情報を共有する。 ○学級作りの細かなシステムのマニュアル等を検討する。 ○保護者・生徒・教師間の、情報の共有化を推進する。
	保護者との連携	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	学年便り、学級便り、学級懇談、PTA活動等を通じて、保護者との連携を深め、保護者が積極的に参画できるように努める。	3.0	3.1	○学校・学年便りや学級通信を充実させ、学校が行っている教育活動や生徒の学校生活の様子を理解していただく。 ○学年懇談会や個人懇談会などとおして、家庭との情報交換を密にするとともに、保護者の思いをしっかりと聞き、受け止める。	○学年通信、学級通信を通して学校での様子を発信した。 ○予測される問題に対して、抑止的・早期発見的に対処できるように、保護者と個別対応を心がけた。	○通信の内容充実 ○校内・教室内掲示物なども充実し、学校生活の理解が、視覚的にも深まるように工夫する。
	生徒指導方針の共有と指導体制	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	全教職員の共通理解のもと問題行動の未然防止・早期発見・早期解決に努め、問題行動に迅速かつ一貫した指導に当たる。	3.0	3.1	○定例の生徒指導部会について、月曜日が休みの時には、火曜日に行うようにするとともに、必要があれば臨時的に会を設けるようにする。 ○職朝メモや回覧等で、全職員での共通理解のもとで生徒指導にあたるように心がける。	○定例の生徒指導部会を金曜日に行い、SCの先生も含めて行えた。 ○職朝メモや回覧等で、全職員での共通理解のもとで生徒指導にあたることができたが、やや早期問題をすぐ共通理解できずに別室などの対応があり、後手になった部分もあった。	○情報共有 ○見通しをたてた生徒指導 ○指導方針の認識のすれや曖昧な内容事案の検討。
	生徒指導（内面的理解・共感）	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	一人一人の生徒の内面を共感的に理解し、人間的ふれ合いに基づいた指導を継続するとともに、スクールカウンセラー等を効果的に機能させながら、生徒間相互の望ましい人間関係の構築に努める。	2.8	3.0	○いじめアンケートやQ U等について、研修を行い実施後の活用についても計画を立てて実施する。 ○教育活動の様々な場面を通じて、生徒の内面理解に努め、それにもとづく生徒指導を心がけるとともに、問題行動やいじめの未然防止に努める。 ○兵庫教育大学教員を招き、生徒理解について職員研修を行う。	○いじめアンケートや教育相談も2回ずつ行えたが、それを生かす対応がまだできるかと検討が残る結果となった。 ○教育活動の様々な場面を通じて、生徒の内面理解に努めたが、SNSなどの問題を十分に未然に防ぐことが十分にできなかった。 ○中学校からの依頼ではなく、大学側からのいじめ事案の対応などの話があるのみで、もっと積極的に講演依頼を中学校からしていかなければならない。	○生徒指導担当やカウンセラーとの協働 ○大学の発達心理センターの活用 ○外部の機関と連携すべき内容の検討
生徒指導（規範意識・態度）	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
学校や社会でのルールやマナーについて、全教職員が自ら範を示すとともに共通理解のもとで生徒の規範意識の向上に努める。	2.8	2.9	○いじめ、性教育、薬物、情報モラル等、生徒指導にかかわる様々な問題について、職員研修を行う。 ○挨拶や言葉づかい、物を大切に扱うことなどの指導を徹底して行う。 ○日常生活に関するルールやマナーについて、職員が行動で手本を示す。	○いじめ、性教育、薬物など生徒指導にかかわる様々な問題について、職員研修を行わず保健の授業のみで終わった。 ○挨拶や物を大切に扱う、時間を守るなど、指導を普段の学校生活や部活など様々な面から行えたが、教師全員共通理解は不十分であった。	○教員も含めた学校全体の規範意識の向上を図る。 ○情報モラルの講演を、保護者参観と兼ね2回開催を目指す。	
情報教育	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
教育機器の利用について、正しい知識と技術を習得させるとともに、ルールやマナーなど情報社会に生きる上で身につけておくべき態度を育成する。	2.5	2.8	○教育機器の活用については教員研修会や教員相互の授業参観を通して技術の向上を図る。また、生徒の活用については、通常授業での活用を図っていく。 ○情報活用能力と情報モラルについては、学級活動、道徳、総合学習などを通して計画的・体系的に指導を行う。 ○携帯電話やインターネット、SNS利用については、生徒会などを通して、生徒が自ら望ましい使い方を考え、生徒同士が共通理解を図る取り組みを進める。	○生徒の情報機器の活用については、技術科・総合学習など授業をとおして進んでいる。 ○情報モラル教育では、教材を使った取組はできなかったが、日常生活の中でしようについて呼びかけや指導を行った。	○日常生活の中で情報機器をどのように利用するのがよいかを考えさせる。	

中学校としての魅力

	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
進路指導の充実	キャリア教育					
	発達にに応じた課題を用意し、キャリア総合選択授業やアントレプレナー教育を軸として生徒のコミュニケーション力、人間関係形成力、リーダーシップ、課題対応能力等を鍛え、社会的自立に必要な力を育てる。	3.1	3.1	○3年間のアントレプレナー教育の取り組みを、改良しながら更に統括的に進めていくことが効果的である。 ○キャリア選択授業の全校発表やアントレプレナーの学年発表の持ち方に課題が残っている。 ○他学年との異年齢交流の意義を認識し、上学年のリーダーシップが発揮しやすい環境を整備する。	○進路＝自分の生き方の指導という観点から、3年間を見据えて、自分を見つめ、他者を理解することはできた。	○活動報告を、文章でまとめ、いつでも閲覧できるようにする。
特別支援教育の充実	特別支援教育の推進	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	特別支援教育についての理解が深まり、全教職員の共通理解のもと、合理的な支援を行い、ユニバーサルデザインの授業づくりに努める。	2.7	2.6	○各教科の取り組みの成果を、全職員で共通理解する機会を増やしていきたい。 ○生徒個々の手立てについて、大学の先生方と交流ができています。さらに研修を続けていきたい。	○支援部会、職員会で情報共有に努めた。 ○個別支援の機会を作った。	○ユニバーサルデザインの研究成果を具体的に反映させる。
	特別支援教育の支援体制	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
個々の課題に応じた個別指導計画を作成し、大学の先生方と連携を密にして、適切な指導に向けた実践研究を進めている。	2.5	2.4	○大学と中学校との連携が図れ、生徒支援について多くの助言を頂き、教育効果が得られた。また保護者対応についても見直すことができた。 ○支援するという意識しすぎず対応することが、時として本人を伸ばすことにつながる場合がある。	○支援の必要な生徒を見極め、可能な支援について相談した。 ○大学の先生の助言が参考になった。	○支援の方法と具体的な取り組みの情報共有する。	
特別活動の充実	特別活動・学校行事	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	生徒会を中心に生徒一人一人が主体的に取り組めるよう計画し、自主的・実践的な態度を育てるとともに、学級、学年、縦割りのグループ、全校などの様々な集団を構成する中で、目標に向かって努力し達成する喜びを味わわせる。	3.1	3.1	○各専門部会の関連を整理し、全校生徒がより活発に動けるような生徒会活動のあり方を検討する。 ○学校行事において、生徒自身が主体的に取り組める内容を吟味・検討して実践する。 ○学校行事だけでなく、日頃の学校生活の中での生徒会活動を充実させるための方策をとる。	○生徒主体という言葉に甘えて放任になり、計画・準備が不十分な場面が見受けられた。 ○生徒会を中心に生徒一人一人が主体的に取り組めるよう計画・準備し、集団で目標に向かって努力し達成する喜びを味わうと同時に、生徒一人ひとりの居場所ができています。	○行事等の際に、教師間、教師-生徒間の連携を密にする。 ○現在の取組を精査し、一層の自主性・主体性の育成を図る。
保健・安全指導の充実	防災教育	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	附属学校園における安全確保及び安全管理の手引きに基づいた訓練や学習を実施し、常に防災意識を高めておくとともに、非常時において「生き抜く」ための知識と技能を身につけさせる。	2.7	2.9	○危機管理マニュアルを教職員に徹底させ、緊急時の教員の対応体制や安全確保ができるように訓練しておく。 ○防災訓練では、教員自らが範を示し、その意義を生徒にしっかりと理解させる。 ○危機対応に関する職員研修を行う。 ○防災訓練などで、その訓練の必要性をその都度説明する。 ○教職員だけの日頃から危機管理対応の練習をしておかなくてはいけない。AEDの使い方やけがの対応、アナフィラキシーや様々な対応の仕方をしておく必要と実践力の強化が必要。	○教科や学年の特性を生かした防災教育が推進できた。 ○訓練や講演が、生徒・教員の危機対応について考える契機となっている。 ○危機管理マニュアルの把握や緊急時の初期対応に差が見られる。	○危機管理におけるマニュアルの見直しと周知徹底を推進する。 ○教員・生徒が思考・判断する力を育む学習機会（訓練を含む）を推進する。
	食育・給食指導	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
望ましい食習慣を身につけ、健康な食生活を送るための指導を、計画的に行う。	2.8	2.7	○食育の一環としての給食であり、家庭での食習慣についても、注意を促す。 ○学校としての食育計画を明確にする。 ○残乳残食の実態を、給食便り等で定期的に保護者に知らせ、家庭での協力も要請する。 ○ふるさと給食等、給食の意義を理解させる。	○落ち着いた食事時間を確保し、アレルギーの把握や残乳計量など、食の在り方について啓蒙活動に取り組んでいる。	○生徒主体の食育週間活動を行なうと共に、PTA・部活動等の場で食育を推進する。	
健康・安全教育	健康・安全教育	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
	一人一人の健康・安全に配慮し、保護者や学校医とも連携を図りながら健康教育を推進するとともに、災害発生時にもリスクを最小限にとどめる指導を行う。	2.9	2.7	○養護教諭が学年の仕事や部活の顧問をしなくてもいい環境をつくり、本来の仕事に専念できるようにする。 ○養護教諭が出張などで不在の時に代替を入れるようにする。 ○日常的に健康安全指導を行うとともに、救急救命講習を充実させる。（救急救命講習を再開する、3年生対象） ○生徒が健康について、関心をもっと持ってもらうためには、生徒が知らない体の力を掲示物等で表し、身近に感じてもらうようにする。 ○心肺蘇生などの研修を持つ必要がある。 ○教職員だけの日頃から危機管理対応の練習をしておかなくてはいけない。AEDの使い方やけがの対応、アナフィラキシーや様々な対応の仕方をしておく必要と実践力の強化が必要。	○安全に十分に配慮した授業づくりを努めた。 ○養護教諭と情報交換を行い、共通理解を深めるよう努めた。 ○災害が起こってからでなく、起こる前に理論的に危機管理対策を、より具体的に示すことができた。	○日常的に健康安全指導を行うとともに、救急救命講習を充実させる。 ○人の命の尊さの立場から、アプローチする。
	学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価	○評価は概ね適切である。 ・様々な観点から、ネットいじめやネットトラブルについての評価が進められることを期待する。 ・登下校時の安全指導やマナー指導の推進が必要であると考える。 ・学校内外での防犯・防災体制を構築するとともに、近隣学校や地域・行政との連携推進を期待する。				

附属学校としての魅力	学部・院との連携・強化	実地教育（教育実習）	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
		ともに研究を進める意識を持ち、自身の資質向上を図ることで質の高い実地教育が行えるよう努力し、実習生に基本的な知識と技能の習得と教職への理解を図り、教師に必要な素養を高める指導を行う。	3.1	3.1	○実地教育実施 ○実習の心構えを事前に徹底して指導する。 ○大学と連携して取り組むと共に、校内でも全体の共通理解を徹底させる。 ○実地教育に関する研修を行う。 ○実習ノートの書き方も含め、実習生との会議の持ち方などの教師同士の共通理解が必要。 ○大学と連携して取り組む。	○実習生徒の打合せに時間をかけて取り組むことができた。	○大学と連携して取り組むと共に、校内でも全体の共通理解を徹底させる。
	教育環境・生活環境の整備	施設・設備	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策
		施設・設備の定期点検と拡充を行い、校内の安全を確保すると共に、教育効果を高めていけるよう教育環境の整備に努める。	2.9	3.1	○学期に1回（4月、9月、1月）定期設備点検を行い、補修の必要な場合は、速やかに修繕する。 ○教職員と生徒が協力して、節電節約に努める。	○各担当区域において、点検・整備を行うことができた。 ○教育環境については、少しずつ改善されている。 ○全校的な安全点検が十分ではない。	定期設備点検の内容の充実と、実施の遂行。
	大学・附属学校園間の連携	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
		附属学校運営委員会での方向性をもとに、大学及び附属学校園間の連携を深め、子どもの発達段階に応じた効果的な教育活動をめざす。	2.5	2.6	○幼・小・中の三附属の教員同士・児童生徒同士の交流が深まるように、授業や行事の交流を行う。 ○子どもの発達段階に応じた教育課程を検討するため、協力して学習面や生活面のアセスメントを行う。	○大学との研究については、組織化が進みスムーズになってきた。 ○教科により差はあるが小中連携は進んでいる。	○小中間で児童生徒の情報共有と相互観察をさらに推進する。 ○大学との連携推進委員会を活用する。
大学教員との共同研究の実施	指導力の向上	27年度	28年度	28年度 改善の方策	28年度 取組達成の状況	29年度改善の方策	
	専門的な知識や技能を磨くための研修等に積極的に参加し、大学の先生方との連携を密にしながら、課題解決のための情報収集にも努め、教師として指導力の向上を図る。	2.6	2.8	○顕著な研究を行った教員や興味深い研修に参加した教員を講師として、現場研修を行い、指導力を向上させる。	○大学との連携窓口ができたが、活用が限定的であった。 ○研修を受ける機会が、分掌により制約を受けている。	○研修部門と研究部門を明確にし、年間計画を提示することによって、教員が研修に参加、情報共有しやすくなる。	
				○評価は概ね適切である。 ・附属学校園間の連携を、さらに充実させることを期待する。 ・大学との連携を深め、さらなる研究推進や教員に資質向上を期待する。 ・生徒指導、安全・防災・防犯教育等、様々な場面で近隣学校や行政、地域との連携を深めることを期待する。			
全体としての評価について		○自己評価の方法は概ね適切である。自己評価が厳しくなっているが、今後も高い意識での取組を期待する。 ・生徒・保護者へのアンケート結果を分析し細かく評価することで、評価の信頼性を高めている。 ・アンケート結果に謙虚に向き合い課題を明確にしている姿勢に好感が感じられる。 ・今後もこれらの姿勢を維持し、学校教育目標達成に向けて努力を続けて欲しい。					